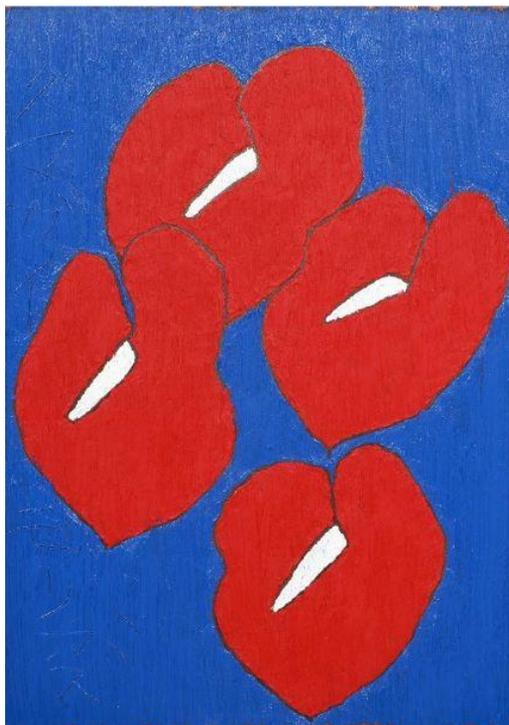


# 天童市美術館収蔵品 熊谷守一 いのちを描く



《アンセリウム》1973年

展覧会名	天童市美術館収蔵品 熊谷守一 いのちを描く
会期	2023年3月18日(土)～4月23日(日)
休館日	3月20日(月)、3月27日(月)、4月から無休
時間	午前9時～午後5時(最終入館は午後4時30分まで)
料金	一般900円、高校生450円、中学生以下無料 ※大学生・専門学生は一般料金となります ※障害者手帳をお持ちの方、およびその介助者1名の観覧料は半額となります。 ※お得な年間券は、3,300円で3名様まで1年間何度でもご利用できます。
主催	公益財団法人さかた文化財団 酒田市美術館
共催	酒田市、酒田市教育委員会
協力	天童市美術館、熊谷守一つけち記念館、藤森武(写真家)
監修	池田良平(天童市美術館館長)
本資料に関する 問い合わせ	酒田市美術館 学芸員:井上瑠菜 TEL0234-31-0095 FAX0234-31-0094

展覧会概要

この度、当館では特別展「天童市美術館収蔵品 熊谷守一のちを描く」を開催します。本展でご紹介する熊谷守一(1880-1977)は、岐阜県恵那郡付知村(現・中津川市付知町)出身の画家です。守一は身近な自然や生き物などを単純な形態と明快な色彩で描き、その独自の作風は人々から「モリカズ様式」と呼ばれ、親しまれてきました。

17歳で上京した守一は、慶応義塾に1学期間通ったら自分の好きなことをして良いという父との約束を果たし、絵の世界へ進みます。1904年には現在の東京藝術大学の前身である東京美術学校の西洋画科撰科を主席で卒業。画家として歩み始めます。文展、二科展、二紀展など公募展に参加後、無所属となり、孤高の画家として自由に作品を発表しました。

本展では、守一作品を多数収蔵する天童市美術館のご協力のもと、初期から晩年にかけて描いた代表作を含む油彩画や日本画など約75点を展示し、独自の表現を追求し続けた画家・熊谷守一の生涯をご紹介します。また、晩年の熊谷の姿を撮り続けた写真家・藤森武の写真も同時展示します。

本市で守一の個展を行うのは今回が初めてです。本展を通して、絵や言葉、その生き方で人々を魅了し続ける熊谷守一の世界をお楽しみください。

展覧会の構成

第一章  
画家としての出発

天童市美術館収蔵品守一作品約75点で迎える  
熊谷守一の生涯

熊谷守一は、1880年、現在の岐阜県中津川市付知町に、父・孫六郎と母・たいの七人兄弟姉妹の末子(三男)として生まれました。製糸業をはじめ、多くの事業を手がけ財を成した実業家の孫六郎の元に生まれた守一は、3歳の頃に、生母と離れ、岐阜県厚見郡今泉村西野(現在の岐阜市西野町)にあった父の経営する熊谷製紙工場の隣の家で、複雑な家庭環境のなか幼少期を過ごします。守一が画家を志したのは17歳の頃。反対する父親の「もし慶応に一学期間真面目に通ったら、お前の好きなことをしてもいい」という約束を果たし、絵の世界へ進みます。

本章では、制作初期から晩年にかけて描いていた裸婦や風景を中心とした守一の作品を通して、守一が独自の表現を追求し、模索する中で変化していった画風の変遷についてをご紹介します。

## 展覧会の構成

**第二章**  
**守一が描いたもの****天童市美術館収蔵品守一作品約75点で迎る  
熊谷守一の生涯**

守一は70年という長きにわたる画業の中で、さまざまな画題を描きました。初期は裸婦や風景画をテーマに描く傾向がありましたが、1915年に再上京して以降、友人たちとの交流の再開や、秀子との結婚、そして子どもの誕生と死を経て、守一の画題の選択は徐々に広がりを見せます。晩年になると、自身の庭に住む昆虫や植物、鳥や猫など小さな生き物たちを、「モリカズ様式」と呼ばれた単純な形態と鮮やかな色彩で描きました。

本章では、守一の画題に注目し、1940年以降から晩年にかけての油彩画をご紹介します。また章の後半では、守一が描く生き物たちの姿を版画を交えてをご紹介します。

**第三章**  
**晩年の暮らし**

守一といえば、カルサンと呼ばれる独特の服を着て、白髭を長く伸ばした「仙人」のような典型的なイメージがあるのではないのでしょうか。また、1967年には文化勲章を辞退するなど、何にも属さず飄々とした守一の姿が、美術界だけでなく社会的にも話題になりました。

そんな守一の晩年の姿を、写真家・藤森武は1974年から3年間撮影し続けました。藤森氏はこの時の取材と写真を、写真集『独楽』（講談社）としてまとめ、1976年に発表しています。守一と藤森氏との出逢いは偶然でした。

1974年の夏のある日、小説家・武者小路実篤の娘婿で、友人の武者小路侃三郎氏に「いまから熊谷守一さんのご自宅に行くけど、一緒に行かないか」と誘われたそうです。守一が大の写真嫌いと聞いていた藤森氏は、カメラを持たずに熊谷家を訪ねるのでした。本章では、藤森氏が撮影した守一の姿を写真パネルでご紹介します。

**第四章**  
**熊谷守一の  
日本画と書の世界**

守一は東京美術学校入学前に、予備校の共立美術学館で日本画の基礎を学んでいました。再び日本画の筆をとったのは1930年頃。1923年から1931年頃まで制作が進まずにいた守一を心配した友人たちが勧めたことがきっかけで日本画の制作に取り組むようになります。1937年、守一が描いた日本画に感心した二科仲間の浜田葆光がもっと描くように勧め、関西、名古屋での展覧会まで斡旋してくれたことから本格的に描くようになりました。この展覧会によって、守一の日本画は高く評価され、方々から求められるようになります。

また、書の制作も人からの勧めにより始めたものでした。勧めたのは、のちの守一作品コレクターになる木村定三でした。作品の箱書きを見て、その立派な文字に感心し依頼したそうです。

本章では守一の日本画と書の世界をご紹介します。

報道・広告用画像

画像1～4を報道・広告用に限りご提供いたします。ご希望の方は下記の使用条件をお読みの上、酒田市美術館までお問合せください。なお、広告用画像は本展覧会に関する情報掲載以外の目的に使用することは出来ません。(個人のブログへの掲載や鑑賞等を目的とする場合にはご提供できません。)

[使用条件]

- ①報道・広告用画像掲載には、必ずキャプション(作品名・制作年等)が必要です。画像下部のキャプションを記載ください。
  - ②トリミング・文字載せはご遠慮ください。
  - ③著作権申請手続きならびに情報確認のため、お手数ですが、校正データを酒田市美術館までお送りください。
- 以上、ご理解・ご協力のほど、何卒宜しくお願い致します。

1



《アンセリウム》1973年

2



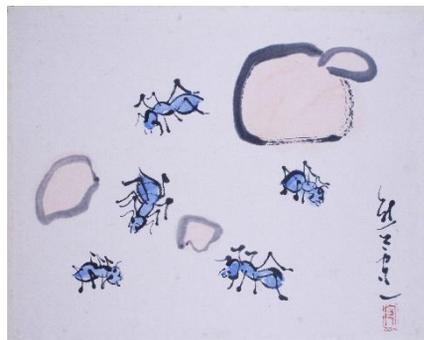
《うさぎ》 1965年

3



《五色沼》 1956年ころ

4



《蟻》制作年不詳